

特 72

50

非
賣
品

中等漢文讀本

六卷

參考書

全

國語漢文研究會編
明治書院發行

301592-001-4

特72-50

中等漢文讀本 卷6 參考書

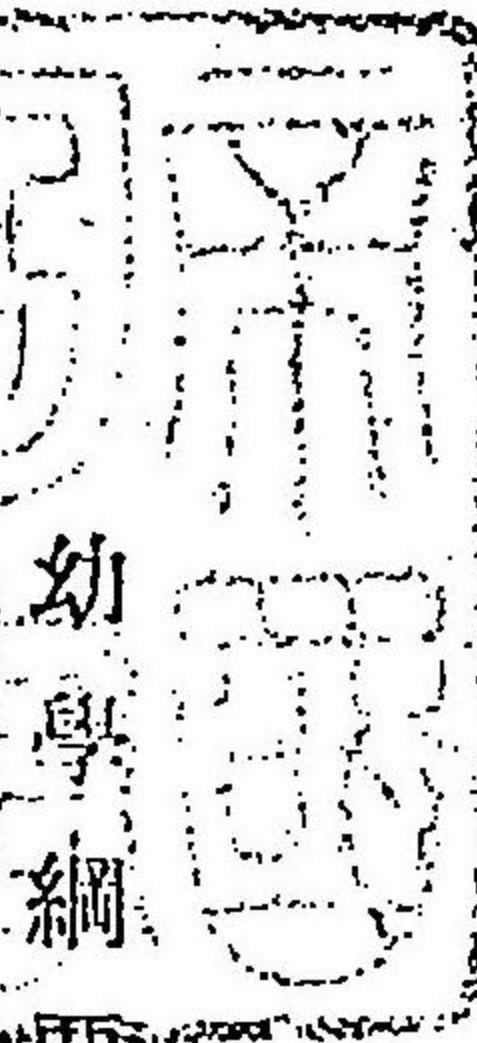
國語漢文研究会/編

M34.8

DBV-0001

特刊
50

中等漢文讀本卷六參考書



幼學綱要序



○幼學綱要 元田氏が、聖旨に本づき、倫理の綱要を、忠孝節義等の部門に分ち、門毎に先づ經語を掲げ、次に和漢の善行を類編せし書なり、○元田永孚 熊本の儒者、號は東野、通稱三左衛門、仕へて編修官に任じ、侍讀となる、明治二十四年一月歿す、年七十四、○明本末 大學に物有本末、事有終始とありて、註に徳を明かにするを本となし、民を新にするを末となす、止るを知るを始となし、能く得るを終りと爲す、言ふ心は、人に學を教うるの要は、第一己を修め、次に人を治むるにありとの義なり、○民志定而天下安 その民の志が確定して、道徳を重んじ、各その職に安んずる時は、亂臣賊子の出づることも無く、天下安穩なり、換言すれば、人民が、各正心、誠意、修身、齊家の道を全うし得れば、治國、平天下は、自然に期して至るべきをいふ、○建極 書經洪範に皇建其有極とありて、疏に、人君爲民之主、大自立其有中、道とあるに本づく、○六經 一に六藝とも書く、詩經、書經、樂經、易經、禮記、春秋をいふ、この中、樂經は早くより亡びて傳はらず、○華夏 華は、文華の義、夏は大なり、支那人が、己の國を尊びていふ稱なり、○僂焉 僂音「ベン」、勉に同じ、禮記の表記に、僂焉日有孳孳の註に、僂焉は、勤勞貌とあり、○蕭陶 教

誨育成すること、火の物を薫し、陶の器を爲るが如くするをいふ、宋史に、今人善教其子弟者、必延名徳之士使與之處、以薰陶成性とあり、

楠氏論

○低回 紆衍の貌、また踟躕不進也と註す、○巖立 巖音「ギョウ」、高く峻しく立つなり、○居然 自ら安んじて動かざる貌 ○障江河回天日 強賊を挫き、帝位を復するを謂ふ、○復辟 辟は君なり、爾雅に、皇、王、后、辟、君也とあり、復辟は、君位に復するをいふ、○犬羊狐鼠之徒 足利の徒を斥す ○彈丸黒子之地 微小の地なり、庚信の賦に、地惟黒子、城猶彈丸とあり、黒子は痣なり、○三朝 後醍醐、後村上、後龜山の三朝なり、○漸盡 漸は音「セイ」、説文水索也、又凡物竭盡皆曰「漸」と註す、○資望 家資人望を謂ふ、○南風不競 南方の國の詩を、南風といふ、之を歌ふに、その聲調盛んならず、以て南方の國の、衰微して振はざるに況ふ、左傳に、吾驟歌北風、又歌南風、南風不競多死聲、楚必無功とあり、楚は南方の國なればいふ、こゝは、南朝の衰微せるをさす、

陪游笠置山記

○笠置山 山城に在り、○文政 仁孝天皇の年號、○我公 藤堂高猷、○撫封 撫は有なり、撫封は封邑を撫有するをいふ、○上野城 伊賀に在り、○蒙塵 天子は道を清めて行き、九重の内に居

る、故に外に奔るを、蒙塵といふ、左傳に、天子蒙塵于外、敢不奔問、官守とあるに本づく、○均服 左傳僖公五年に、均服振振とあるに本づく、群臣同じ揃の戎服にて行くをいふ、○太平記 四十卷、著者詳かならず、花園帝の文保二年より、後村上帝の正平二十二年に至る、凡五十年間の事蹟を記す、○足助二郎重範 鎮守府將軍源滿政の後なり、五世の祖重秀、始めて參河足助に居り、足助冠者と稱す、重範射を善くし、勇敢を以て聞ゆ、詳しくは大日本史を看よ、○賊將二人 荒尾九郎、及びその弟彌五郎をいふ、○以巨石投賊 般若寺の僧本性坊なり、○陶山藤三 名は義高、備中の人、○建久 後鳥羽天皇の年號、○白鳳 天武天皇の年號、○天平勝寶 孝謙天皇の年號、○黄鐘調 十二律の一、十二律とは、壹越、斷金、平調、勝絶、下無、雙調、覺鐘、黄鐘、戀鏡、盤涉、神仙、上無これなり、○欽然 欽は口感の切、坎空の貌、○王法 朝廷の政法をいふ、○萬劫 佛語永久疆りなきをいふ、儒に世といひ、道に塵といひ、佛に劫といふ、李白の詩に、蒼穹浩茫々、一一太極長とあり、○祐信公 藤堂高兎の諡號、○廣袤 東西を廣といひ、南北を袤といふ、○元元 五忽の切、動かざる貌、脆脆に改め作るべし、○坪 平地なり、○高山公 高虎の諡號、○下春 日暮なり、淮南子に、日至連石曰「一一」、晡後とあり、○津阪孝綽 字は君裕、東陽と號す、津藩の文學なり、○游豫 孟子梁惠王下に、夏諺曰、吾王不遊、吾何以休、吾王不豫、吾何以助、一遊一豫、爲「諸侯度」とあるに本づく、朱註に豫樂也、(中略)王者一遊一豫皆有恩惠以及民、而諸侯皆取法焉、不敢無事漫遊以病其民也とあり、

楠公神鈴記

○陰陽家 占筮相地等の事を掌る人といふ、往昔中務省に屬する寮に、陰陽寮といふあり、その屬官を陰陽師といふ、すべて官私の別なく、陰陽五行の説を修むる者を、陰陽家といふ、その源は、漢書藝文志等にある、陰陽家者流に出づ、○玄武 四神の一、四神とは、東を青龍、西を白虎、南を朱雀、北を玄武(龜の象)といふ、天の四方の星象によりて名づく、○藤黄門 中納言藤原藤房卿なり、○禰祭 師旅止まる所の祭の名、禮の王制にも、禰於所征之地とあり、○延元帝 後醍醐帝をいふ、○翳昔 翳は於計の切、昔は鳥外の切、潘岳射雉賦の字面、草木の遮蔽するを謂ふ、○毘毘 爾雅の註に、毘似鯉、赤黄色、大尾、喉、鼠江東呼爲爲毘とあり、○靈籙 靈は敷馮の切、雲師なり、屈原の離騷、淮南子天文訓、皆豐隆に作り、水經には封隆に作る、皆同じ、○觀伯 觀は、古文の風字なり、風の神をいふ、○欽 欽羨なり、○什襲 什は十なり、襲は重なり、鄭重に珍藏する義、○重陽 陰曆九月九日の節句なり、九は陽數、故にいふ、

高山彦九郎傳

○白哲 潔白なり、左傳に白哲鬢眉とあり、○精悍 銳勇なり、史記游俠傳に、爲人短小精悍とあり、○饒粥 「カエ」の厚きを饒といひ、薄きを粥といふ、○健訟 自ら強くして息まず、好んで訟を爲すの謂なり、易に險而健訟とあり、○天明季年歲饑 天明は光格天皇の年號、その四年なり、

○衷甲 衣の下に甲を被るなり、左傳に楚人衷甲とあり、されどこゝは鎧の下に着る鎖甲(クサリカタヒラ)の類をいふならむ、○板橋 中仙道に在り、東京を去る里餘、○喝 舌うちして叱る聲なり、○股栗 栗は慄なり、怖れて股のふるふる義、○折節 主持する所の意を屈ぐる也、戰國策に、以秦之強、折節而下、與國、臣恐其害於東周とあり、○刀櫛 刀の柄なり、○一權人 田沼意次を斥す、○般般 愛ふる貌、○弊事悉革 白河侯松平定信、老中に任ぜられて、弊政を一新せしを斥す、○游道極廣 游道は、交游に同じ、史記陳丞相世家に、齋用益饒、游道日に廣しとあり、○一侯 松平定信なり、○館主人 久留米藩宮川嘉膳の家に寓す、主人は即ち嘉膳なり、○訓 音「シ」、刀を挿むなり、○摠 援なり、○好在 猶ほ健在の如し、別に臨み相告ぐる辭なり、

岩倉村 燧髮碑

○井上毅 肥後熊本の子、梧陰と號す、幼名は多久馬、木下犀潭の門に入り、俊才を以て聞ゆ、明治三年、東京に出て、大學少舎長と爲る、後ち司法省に奉職し、卿江藤新平に従ひ、歐州に航し、累進して文部大臣に至り、二十八年三月薨す、年五十二、著すところ梧陰存稿あり、○岩倉公 名は具視、幼名は周丸、具慶の養子、明治十六年薨す、年五十九、○大久保 名は利通、幼名正助、鹿児島の人、明治十一年五月、刺客の爲めに薨す、年四十七、○廣澤 名は具臣、通稱兵助、萩藩の士、明治四年一月、刺客の爲めに死す、年三十九、○禁掖 天子居す所を禁といふ、禁掖曰く、漢制天子所居門閭有禁、非侍御之臣不得妄入と、掖は音「エキ」、宮闕の旁の小門を、左右

掖門といふ、禁掖は猶ほ禁中といはんが如し、○丁卯 慶應三年なり、○攝關 攝政と、關白といふ、○閩外 閩音「コン」、門限なり、史記馮唐の傳、閩以内者寡人制之とあり、易の師卦の註にも、閩外之事、將軍所裁、臨事制宜不_レ必皆依_レ君命とあり、○巳者 巳は起なり、○勳德 勳は古文の勳の字なり、○勅石 勅は音「ロク」石に刻みつくるなり、○屯困 屯音「チュン」、易に出づ、艱難困苦の義、

橋本景岳之碑

○藤田東湖 名は彪、字は斌卿、通稱虎之助、後ち誠之進と改む、常陸水戸藩の士、父幽谷、水戸藩に仕へ、彰考館の總裁と爲る、東湖父に襲ぎて藩に仕へ、大に重用せられ、氣節を以て自ら任ず、安政乙卯十二月二日、江戸地大に震ひ、屋梁に壓せられて歿す、年五十、著す所る、回天詩史、常陸帶等あり、○岳武穆 宋の忠臣、岳飛、諡して武穆といふ、○緒方洪庵 蘭醫なり、名は章、字は公裁、天保二年、歳二十二、東遊して坪井信道の門に入り、苦學多年、業大に進む、遂に業を大坂に開く、時に年二十九、治を乞ふ者、日に門に滿ち、生徒も亦月に多し、その生徒を養成するや、各その材によりて之を養成す、佐野常民、福澤諭吉等、皆その門に出づ、文久三年六月歿す、年五十四、○性理 宋儒の性命、義理の學を斥す、○仕學並長 學術と吏務と、一方に偏長せず、並び進むる義、論語に學而優則仕、仕而優則學とあり、○翁然 翁は許及の切、合なり、盛なり、盛んに合同する貌、晉書王衍傳に、朝野翕然、謂_レ之一世龍門とあり、○安政 孝明天皇の年號○抵牾

牾は觸なり、牾は讀んで逆と爲す、相觸れて差違する義、漢書司馬遷傳に、甚多_レ疏略、或有_レ抵牾とあり、抵牾は、牾牾に同じ、○温恭公 十三代將軍徳川家定○一橋黃門 中納言一橋慶喜○越公 松平慶永○青蓮院宮 尊融親王、後ち髮を蓄へて中川宮といふ、○鷹司 名は輔熙、時に右大臣たり、○近衛 名は忠熙、時に左大臣たり、○三條 名は實萬、時に内大臣たり、○井伊直弼 掃部頭と稱す、近江彦根の城主、中將に任ぜらる、萬延三年三月三日、水戸の浪士に刺し殺さる、○紀侯 初の名は慶福、後ち家茂と改む、徳川十四代將軍是れなり、○尾水士 尾州侯は、徳川慶怒、時に權中納言たり、水戸侯は、即ち齊昭公なり、土州侯は、山内豊信(容堂)なり、○捕君下獄 獄中の詩に曰く、二十六年夢裡過、顧_レ思平昔感滋多、天祥大節管心折、土室猶吟正氣歌と、以て景岳の入と爲りを想見すべし、○建儲 幕府の世子を定むるをいふ、南齊書に、太子曰、東儲とあり、○傲傲 音「カン」、剛直なり、論語に——如也とあり、○川路聖謨 家世幕府に仕ふ、聖謨外事に執掌して志を得ず、西城の留守に遷り、尋て戊午黨人の獄に坐し、職を褫はれて家居す、明治元年三月世事を憤りて自殺す、年七十、○剗切 適切によく當はまるなり、唐書魏徵傳に、二百餘奏、無_レ不_レ剗切當_レ帝心者とあり、○武田耕雲齋 水戸藩士、少くして勇略あり、善く經濟を知り、又韜略に通ず、藩主景山公に仕へて、老臣と爲り、祿千五百石を賜ふ、尊王攘夷を主張する者を集め、兵を擧げ、敗れて刑せらる、時に慶應元年二月なり、年六十二、辭世の歌に曰く、さく梅の、風に空しく散るとても、馨は君が袖にうつらむ、○寇準、韓琦、范仲淹 三人皆宋の名臣○小塚原 東京千住に在り○杉田成卿 蘭醫なり、名は信、梅里と號す、成卿はその字、安政六年

二月歿す、年四十三、○藜園遺草 二卷、詩文を集む、○祭染 染は神に供ふる稷なり、左傳桓公六年に、潔黍豐盛とありて、黍稷曰染と註す、

與麟嶼童子書

○麟嶼 名は正朝、後ち弘嗣と改む、字は大佐、麟嶼はその號、幕府の儒員なり、姓は菅原、故に修して菅といふ、山田氏、生れて穎悟、嬉遊を好まず、甫めて六歳、能く野乘を讀み、和歌を賦す、七歳にして論孟五經を父に受け、旁ら子史に通ず、物徂徠に師事し、古文辭を修め、唐音を習ひ、旁ら音律を學ぶ、才學超絶、老成人の如く、人皆稱して神童といふ、徂徠又稱して千里駒といふ、室鳩巢、固より徂徠の徒を揆斥するも、獨り麟嶼を天下第一の才子と稱し、幕府に以聞す、將軍吉宗、祿二百石を賜ひ、儒員に補す、時に年十三、享保二十年三月歿す、年二十四、著すところ、尙古堂文集、麟嶼遺稿あり、○太宰純 字は徳夫、春臺と號し、又紫芝園と號す、通稱彌右衛門、信州飯田の人、物徂徠に從ひ學ぶ、徂徠歿後、その門分れて二と爲る、詩文は服部南郭を推し、經術は春臺を推す、春臺亦斯文を以て己が任とす、性剛毅狷介、權貴に屈せず、延享四年五月歿す、年六十八、著すところ標註古文孝經、論語古訓、同外傳、孔子家語増註、聖學問答、經濟錄等數十種あり、○一日不見如三秋 思慕の極めて切なるをいふ、詩經に彼采蕭兮、一日不見如三秋兮とあるをいふ、○箒燈 廣雅に、箒籠也とあり、史記の註に、箒火以籠覆火也とあり、○古人有鑿壁者 前漢の匡衡、家貧にして燭無し、隣舍に燭ありて光逮はず、衡乃ち壁を穿ち、其

の光を引き、書を讀み、遂に大儒と成れり、○程正叔 名は頤、正叔は字、程顥、明道の弟、少くして高識あり、禮にあらざれば動かさず、伊川先生と稱し、正公と謚す、孔子の廟庭に從祀す、○三不幸 程伊川の語に曰く、人有三不幸、少年登高科一不幸、席交兄之勢爲美官二不幸、有高才能文章三不幸也と、○水足生 名は斯立、屏山と號す、通稱平之進、熊本藩の儒者、徂徠の學を唱ふ、享保十七年、賊の爲めに殺さる、

送安井仲平東遊序

○安井仲平 傳卷の五、三計塾記の條下に出せり、○觀 遇見なり、○飢肥 日向の藩名、那珂郡に在り、○寢陋 寢は容の揚らざるなり、陋は貌の醜猥なるなり、○歳之甲申 文政七年なり、○屹屹 健作の貌、○孤介 孤は特なり物に耦なきを特といひ、獸に耦なきを介といふ、○祇役 祇音「シ」敬なり、適なり、こゝは參勤更代をいふ、○湫隘 湫は、卑下なり、隘は狭なり、○戊戌 天保九年なり、○桑梓 郷里なり、桑梓は父の樹うる所る、詩の小雅に出づ、故に故郷のことを用ふ、○子然 子音「ゲツ」、孤立の貌、○僑居 旅寓をいふ、○竈突未黔 竈烟の突が、未だ黒くならざる間に、少時の間をいふ、孔席不煖、墨突不黔の故事を引用す、孔子の席は、煖なる暇なく、墨子の烟突は、黒む暇なく、四方に奔走する義、こゝは間もなく、直ちにの意、○不虞之難 思んばからざる災難にて、上の逢火をいふ、○人倫之變 前の季女天をうけたり、○心計 諸算なり、○格致日新 格物致知の工夫、日に新なるをいふ、○衣川 安部貞任の據りし所、○高館 藤原泰

衡の據りし所○陳蹟 古蹟に同じ

日光山行記

◎中禪湖 中禪寺湖なり、日光山上に在り、周圍五里に過ぎざれども、一千四百「メートル」の高處に在り、男體山は岷々として雲に聳け、湖邊の丘陵は、綠樹蒼鬱として、水光山色の明媚なること、實に筆紙の能く盡すところにあらず、湖水の注ぐところ、懸りて華嚴瀑となり、百餘「メートル」の斷崖を瀉下す◎大谷川 「ダイヤガハ」と訓む、中禪寺湖の末流にて、水極めて清冽なり、鬼怒川に合して、利根川に注ぐ、◎崔嵬 土山の石を戴くもの、詩經に陟「彼崔嵬」我馬虺隤とあり、◎馬回馬「ガヘリ」と訓む、今は道路の修繕成りて、容易に馬にて行き過ぐべく、馬回は名のみ存せり、

◎略約 獨木橋なり、約は、廣韻に横「木渡」水也とあり、蘇軾の詩に、略約横「秋水」とあり、◎巋然 獨り聳ゆる貌◎湖壖 壖音「セン」岸邊なり、湖の岸をいふ、◎上野島 「カウツケマ」と訓む、勝道上人、補陀落（二荒即ち日光）山に上り、寺を建て法を修し、道、靈境と並びに四方に傳はる、桓武帝勅して上野講師とす、これに因みて名づく、島は中禪寺湖中に在り、◎勝道上人 若田氏、下野の人、日光山の開祖なり、詳しくは空海の撰びし、碑文を見て知るべし、碑文は日光山志に出づ、◎空海 佐伯氏、讃州多度郡の人、承和二年三月歿す、年六十二、延喜二十一年、謚を弘法大師と賜ふ、勝道、空海二高僧の事蹟は、元亨釋書、東國高僧傳等を併せ見よ、◎恍然 自失の貌備考 この一篇を授くるには、植田孟縉の著せる日光山志（五卷）を参照せよ、

山行

◎杜牧 字は牧之、樊川と號す、唐の京兆萬年の人、太和二年の進士、人と爲り豪放、狂杜牧の目あり、詩も亦人と爲りに似て豪放なり、晚唐柔靡の風なし、世に小杜と稱し、杜甫に別つ、◎坐「ソマロニ」と訓む、何故とも無く、心進ぶ意、備考 「モミチ」の異名を、紅於といふは、この詩の末句に本づく、

池無名傳

◎襟度 襟は胸なり、◎稽叔夜 名は康、叔夜はその字、晋人、性遠邁にして不群なり、魏の宗室と婚す、中散大夫に拜せらるゝも就かず、常に琴を彈じ、詩を詠じて自ら足るとす、後ち譜を以て害せらる、世に琴康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、王戎、阮咸の七子を、竹林七賢と稱す、康又書を善くす、草書に妙にして、自から一家を爲す、◎阮仲容 名は咸、籍の兄の子、任達にして不拘なり、仕へて散騎侍郎に至る、音律に妙にして、善く琵琶を彈ず、咸、籍と道南に居り、諸阮は道北に居る、北阮は富み、南阮は貧し、七夕の日、北阮衣を曝して錦綺日に焔く、咸竹竿を以て、犢鼻褌を庭に掛けて曰く、未だ俗を免るゝこと能はず、聊又爾のみと、◎塋窠字 大字をいふ◎麒麟兒 頤和、總角便有「清操」族叔榮雅「重之」曰、此吾家之麒麟兒、吾宗者、必此子也とあるに本づく◎梅道人 元の吳鎮の號◎倪雲林 元の倪瓚の號、字は元鶴、博學にして古を好み、詩畫に工なり、家

もと貨産に富む、一旦捨て去りて曰く、天下事多しと、乃ち五湖三泖の間に往來す、人之を望むに仙の若し、◎衣鉢 佛家の語傳統の義、傳燈錄に曰く、初祖達摩、奉佛衣來東土得道者付之、以爲眞印、至六祖大鑑乃置其衣而無傳焉と、又語錄に曰く、五祖弘忍以法寶及所傳袈裟付六祖慧能とあり、法寶とは、鉢盂錫杖なり、轉じて佛法に限らず、師の法を傳へ承くるをいふ、◎案俗 案は粗率なり、◎華人 支那人自國を誇稱して中華といふ、故に支那人自ら華人といふも、我國人よりいふには、漢人と稱するを可とす、◎闖入 闖は音「チン」字彙に或作規、窺規也とあり、韓昌黎同宿聯句に、儒門雖大啓、竊首不敢闖とあり、◎濟勝之具 勝は勝景の勝なり、山水を跋涉するに堪ふる健脚をいふ、世説に非徒有勝情有濟勝之具とあり、◎烟火中人 火食の俗人をいふ、◎幘 畫幘を張るなり、◎五采 青、黃、赤、白、黒なり、書經に以五采彰施于五色作服とあり、◎六法 南齊謝赫古畫品錄に曰く、畫有六法一曰氣韻生動、二曰骨法用筆、三曰應物象形、四曰隨類傅彩、五曰經營位置、六曰傳移模寫と、◎石破天驚 唐の李賀の詩に、女媧煉石補天處、石破天驚逗秋雨とあり◎乃投拜以謝 投は致なり、納なり、◎室 夫は婦を謂つて室とす、周禮に、三十曰壯有室とあり、婦は夫を謂つて家とす、孟子に女子生而願爲之有家とあり、◎絶倒 大笑なり、又氣を奪はれ容を失ふ義とす、晉書衛玠傳に、王澄字平子、有高名少所推服每聞玠言輒歎息絶倒とあり、◎石經十三經 石經には漢唐清等の別あり、漢石經は殘字六百七十五字、唐石經は、開成二年西安府學石本にて、十三經の中、孟子なかりしを、明人補刻す、清石經は、乾隆五十八年敕刊、嘉慶八年敕改定、國子監石本にて、十三經備る、石經の事

は、顧炎武の石經考、翁方綱の漢石經殘字考等に就きて知るべし、十三經とは、周易、尙書、毛詩、周禮、儀禮、禮記、春秋左傳、春秋公羊傳、春秋穀梁傳、孝經、論語、孟子、爾雅をいふ、◎牟嬴 牟は貪なり、嬴は餘なり、◎玉瀾 名は町、徳山氏、天明四年九月歿す、年七十八、詳しくは、近世叢語、近世畸人傳、扶桑畫人傳等を見よ、◎秦箏 秦時に造る所、故にいふ、◎晋宋間想 宋は劉宋なり、晋宋の間は、清談の徒多く出で、世事を以て俗となし、詩酒に耽り、風月を評するを以て高致とするの風あり、故にいふ、◎進乎技 莊子養生主の字面、技藝よりして、遂に道德に悟入する義なり、備考 田能村竹田の山中人饒舌に、大雅池翁、書畫俱高、不入時眼、至沒後聲名隆起、無知不知、推爲當時第一手矣、夫山藏美玉草木澤焉、水蓄明珠沙石光焉、有實者不可掩也如此、豈唯畫哉、

耶馬溪圖卷記

◎讀昔人畫 古人の畫を諦觀し、品評する義、◎造物 造化に同じ、萬物を創造せし者をいふ、列子に造物者、其巧妙、其功深、固難窮難終、また莊子に、偉哉夫造物者とあり、◎戊寅 文政元年なり◎臘月 陰曆十二月なり、冬至の後の三戌に、百神を臘祭するにより名づく、◎攢棟 攢は簇聚なり、棟は音「シヨウ」、聳と通ず、◎箏 箏に同じ、竹胎なり、◎盞 音丑六の切、聳上する貌、◎董巨 董北苑、巨然なり、◎倪黃 五の卷下、岐蘇川記の條下並に前篇に註せり、◎王叔明

元の畫家、都穆の鐵網珊瑚にその畫評あり、また淵鑑類函三百二十七に、妮古録を引きて曰く、倪迂畫、可稱逸品、元之能者雖多、然率承宋法、稍加蕭散耳、吳仲圭、大有神氣、黃子久、特妙風格、王叔明奄有前規、而三家未洗縱橫習氣、獨雲林古澹天然、米癡後一人而已とあり、倪迂は即ち倪雲林なり◎燗 音徐心の切、燗に作る通ず、温なり、◎大白 罰爵の名、爵は「サカツキ」なり、説苑に魏文侯與大夫飲、使公乘不仁爲觴政曰、飲不醜者浮以大白とあり、◎淳齋 柳州の游黃溪記に黛の如く蓄へ齋の如く淳ふの語あるに本づく、水の青緑に湛へたるを形容す、淳は水止るなり、◎合公 畫僧大合なり、雲華と號す、豊後の人、東本願寺の講師なり、蘭竹を畫く、清奇愛すべし、山陽と交り善し、◎詔 丑亞の切、誇なり、又告なり、◎魁 覺の古文なり、◎廿五菩薩 菩薩は梵語菩提(佛道)薩埵(大心衆生また覺衆生)の略、合せて大心ありて佛道に入る義にて、即ち佛の次に位する號、或は薩埵ともいふ、觀世音、勢至、文殊、普賢、虚空藏等の諸菩薩あり、◎粉本 畫藁なり、畫論に、古人畫藁、謂之粉本、前輩多寶、蓄之、蓋其草草不經意處、有自然之妙とあり、◎横長 横物にて、細長き圖をいふ、芥子園畫傳に、その畫式あり、參看せよ、◎所得詩九首 山陽詩鈔に出づ、參看せよ、◎尾路 尾道に同じ、備後三調郡に在る港、人口二萬餘、中國の良港とす、

霧島山に登る記

◎西遊記 解題は、本書卷の五彌陀窟の記の條下に出づ、◎霧島山 日向大隅の界に聳えて、高さ五

千五百尺、睡眠火山に屬すれども、時々鳴動して、灰石を飛ばすことありとぞ、◎冊諾二柱の神 伊邪那諾、伊邪那冊の二神をいふ、◎天のぬぼこ 「ぬぼこ」は瓊矛と書く、瓊を以て飾れる矛かといふ、◎霜月 陰曆十一月なり、◎近國にての大神 霧島神社は、高千穂峰の南麓に在りて、彦火瓊杵尊を祭り、官幣大社なり、◎櫻島山 鹿兒島灣中に在る火山島なり、◎さしも勇氣の若者も 前文の登るもの、不時に紛失することなど毎度の事ゆゑ、薩州の人と雖も、おそれて絶頂に至るもの少し云々、召し連れし僕などは、凡庸の者なれば、若し恐れて紛失などせば悪しかるべしと思案し云々、年若き勇壯の男子ありて、われこそ其の山へ同道すべけれ云々、等の文字に呼應して妙なり、◎唐金 青銅をいふ、もと製法の唐土より傳はりたるに由りて名づく、銅と鉛と混合して造る、分量は銅十に鉛五分の一、乃至七分の三を混じたるものなり、◎石突 矛槍等の本を包む金具にて、尖れるを鐙といひ、平なるを鐵といふ、

登霧島山記

◎皐如列眉 皐は明なり、如列眉とは、その班班として觀るべきを言ふ、◎倬詭 倬は竹角の切、著なり大なり、詭は怪なり、譎なり、◎臥遊 名畫記に曰く、宋宗炳嘗歎曰、老病俱至、名山恐難徧遊、惟當澄懷觀道、臥以遊之、凡所遊歷、皆圖於壁、坐臥向之とあり、◎鴻荒 鴻は大なり、荒は蒙なり、猶ほ大古といふが如し、◎仲冬 陰曆十一月なり、◎祝史 神官をいふ、◎詰朝 詰旦に同じ、平旦なり、左傳に詰朝相見とあり、◎童然 山に草木なき貌、童子の未だ冠せざる

者の如く然り、○一點螺 小山を形容して言ふ、○雲雲 雨の「シヨボク」と降る聲なり、○黒
 於既の切、深黒なり、○鑿々 石聲なり、○炎燼 燼音「ラン」、火の熾に延ぶる貌、○般輪 輪
 は呼宏の切、雷鳴の轟くをいふ、○翕霍 楊雄 甘泉賦に、翕赫留霍とあり、師古の註に、開合の
 貌といへり、○茵硝 藥名、製して火藥と爲すべし、○阿鼻獄 阿鼻は梵語なり、無間と譯す、阿
 は無を言ひ、鼻は救を言ふ、○五色無主 目視眩亂するを言ふ、○躑歩 題音「キ」、半步なり、○咄
 咄 驚怪の聲なり、○鐵 音「タイ」、柄尾なり、即ち石突なり、○碧漢 大空なり、○加手於額
 欣幸の意を表するなり、○刊 苦寒の切、斫なり、○役小角 文武天皇の時の人、性敏悟博學にし
 て最も佛法を好み、咒術を善くす、年三十二、葛城山に入り巖窟に居ること三十餘年にして、後ち
 唐に往きしといふ、○泰澄 持統天皇の時の人、年十四にして僧となり、越知峯に栖み、精勤練行
 し、藤皮を着け、松葉を食ひ、遂に知解を得たり、後ち文武天皇、號を賜ひ神融禪師と曰ふ、○梵
 唄 讀經の聲なり、唄は音「バイ」、偈なり、集韻に、西域謂頌曰唄とあり、法苑に、西方之有唄、
 猶東國之有讚とあり、○蚺蛇 蚺は音「ゼン」、大蛇なり、尾は圓くして鱗なし、身に斑文あり、
 南越志に、蚺蛇は牙五六寸の者あり、土人之を重んずとあり、

支那地理概畧

○支那通史 那珂通世編す、未だ完結に至らず、○南掌 支那の西南にある國名、緬甸と安南とに
 介する、

備考 この一節を授くるには、顧祖禹の讀史方輿紀要、李鴻章の李氏沿革圖、支那通史の挿圖等を
 有るに任せて參看し、なほ東洋史をも對照して講述すべし、

支那歷朝興亡

○唐虞 唐は堯なり、堯初め唐侯と爲り、後ち天子と爲り、陶に都す、故に陶唐氏と號す、虞は舜
 なり、その先虞に國す、故に有虞氏と曰ふ、○七王國 秦、楚、燕、齊、趙、魏、韓なり、○五胡十
 六國 西晋の末より、五胡内地に跋扈し、相攻伐す、その間邦國の興亡するもの凡そ十六國、曰く
 前趙(劉淵)、後趙(石勒)、前秦(苻洪)、後秦(姚萇)、西秦(乞伏國仁)、前燕(慕容皝)、後燕(慕容垂)、北
 燕(馮跋)、前凉(張軌)、後凉(呂光)、南凉(秃髮烏孤)、西凉(李暠)、北凉(沮渠)、夏(赫連勃勃)、蜀(李雄)これなり、
 ○九國 前蜀、後蜀、吳、南唐、吳越、閩楚、南漢、北漢なり、○範型 模倣なり、凡そ鑄式、土
 を以てするを型と曰ひ、木を以てするを模といひ、金を以てするを範といふ、○二十六朝 秦、漢、
 三國、晋、宋、齊、梁、陳、後魏、北齊、後周、隋、唐、五代、遼、宋、金、元、明、清なり、

夏

○夏后氏 禹始め西羌に長ず、夏伯に封ぜらる、故に國を夏と號す、后は、白虎通に揖讓を以て君に
 受く、故に后と稱すとあり、安邑に都す、○漚 音因、一に陴に作る塞なり、○橛 起驕の切、板
 を以て作る、その狀箕の如く、泥上に擲行す、和名「ソリ」○橛 音菊、橛に作る同じ、鐵を以て

之を作る、その形錐に似たり、長さ半寸、之を履下に施す、山に登るに蹉跌せざるなり、○聲爲律
 史記の索隱に曰く、禹の聲音鐘律に應ずるを言ふと、○左準繩 準は平を爲す所以にして、繩は
 直を爲す所以なり、○右規矩 規は圓を爲す所以にして、矩は方を爲す所以なり、左に運用する所
 ろ、人の準繩と爲るに堪へ、右に舉動する所ろ、必ず規矩に應ずるなり、○一饋十起以勞天下之民
 周禮天官膳夫の註に、進食於尊曰饋とあり、勞は去聲の時、慰に同じ、禹一たび饋を進むる
 間、十たび起ちて、天下の民を慰勞す、猶ほ周公の吐哺握髮の類の如し、○寡人 國君の自稱、猶
 ほ寡徳の人と言ふが如し、○醴酪 醴は音禮、薄酒なり、師古曰く、甘酒也、少麴多米一宿而熟
 と、酪は酢醱なり、○儀狄 儀は姓、狄は名、戰國策に昔者天女、令儀狄作酒とあり、○九牧之
 金 九牧は九州の牧なり、初め舜天下を分ち、十二州と爲す、禹また九州と爲す、天下の美銅を收
 め、鑄て九鼎を爲り、以て九州に象る、○三德 書經の洪範に出づ、正直、剛、柔の三なり、○塗
 山 國の名、江南鳳陽府懷遠縣に在り、○玉帛 玉は桓圭、信圭、躬圭、穀圭、蒲璧の五玉にて、
 諸侯の執る所ろ、帛は玄、纁、黃の三帛にて、附庸の執るところなり、○會稽山 浙江紹興府會稽
 縣に在り、輯覽に、王會諸侯計功而崩、因辨焉、命曰會稽、會稽者會計也とあり、○謳歌朝觀
 謳歌は、功德を謳歌するをいひ、朝觀は諸侯が天子に見ゆるを謂ふ、○有扈氏 夏と同姓の國、陝
 西西安府郿縣は即ちその地なり、○甘 地名扶風郿縣に在り、○肉脯林 乾肉を脯といふ、山林
 はその多きに喻ふ、○國人大崩 山の崩るを崩といふ、民心の離る、猶ほ山崩れて之を救ふ無き
 が如きといふ、○鳴條 山西解州安邑縣に鳴條岡あり、即ち是れなり、

殷

○殷 一に商と號す、外紀にいふ、盤庚以後方に始めて殷と號すと、されど必ずしもこれに拘せず、
 殷商並び稱するなり、○亳 音薄、括地志にいふ、宋州穀熟縣西南三十五里南亳故城、即湯都也と、
 ○從先王居 孔安國曰く、契父帝嚳都亳、湯自商丘遷焉、故曰從先王居と○莘 山東曹州府
 曹縣の北に莘城あり、是れその地なり、○夏臺 獄の名、周に圜土と曰ひ、殷に羑里と曰ひ、夏に
 鈞臺と曰ひ、秦に囹圄と曰ふ、名異なるも實は同じ、○南巡 江南廬州府巢縣に桀王城あり、桀こゝ
 に奔る、○桐宮 桐は湯玉の墓の在る所、伊尹宮を營み、太甲を此に放置す、○居憂 舊註に、太
 甲爲仲壬後、故爲居憂三年とあるは非なり、孟子に太甲顛覆湯之典刑、伊尹放之於桐、三年、太甲
 悔過自怨、自艾於桐、處仁遷義三年、以聽伊尹之訓、己也、復歸于亳とあり、太甲の放廢は、
 諒陰の時に在らざるなり、○象箸 象牙の箸なり、一説に箸は殷の樽なり、地に著きて足なしと、
 ○箕子 箕は國の名、子は爵、紂の諸父なり、○土簋 簋は龜の上盤、瓦器、内圓く外方、以て黍
 稷を盛る、○藜藿 藜は「アカザ」、藿は豆葉、○短褐 褐は毛布なり、

周

○周 太王周原に居り、國號を改めて周と曰ふ、武王因て以て天下を有つ號とす、○璽璠 史記の
 註に、赤爵銜、丹寶、止昌舍とあるを斥す、○西伯 紂文王に命じ、西方諸侯の長と爲し、征伐を

母にするを得しむ、故に西伯と號す、○盧芮 二國の名、虞は陝州平陸縣の地、芮は同州馮翊縣の地、○澗南 澗水の南なり、○三分天下有其二 天下の九州、文王に歸する者六州、唯青、兗、冀三州、尙ほ紂に屬するのみ、○呂尙 呂は氏、尙は名、姜姓、○虬 音虯、神獸、○貔 音毘、猛獸、○涇水之陽 涇水は、涇州涇源縣に出て、同州馮翊縣に至り、河に入る、陽は水北なり、○太公 魏了翁曰く、古者稱父爲太公と、○師尙父 通鑑の註に、謂可尙可父、天子師也とあり、○觀兵 觀は、兵威を示すといふ、○盟津 盟は孟に作る同じ、孟州河陽縣に在り、○不悛 悛音筭、過を改めざるなり、○木主 神主なり、紂を伐つは、父の志を繼ぐなり、故に文王の神主を載せて行く、○伯夷叔齊 伯は長なり、兄なり、姓は墨、名は允、字は公信、諡して夷といふ、叔は弟なり、名は智、字は公達、諡して齊といふ、孤竹君の二子なり、○欲兵之 兵之は猶ほ殺之といふが如し、○首陽山 馬融曰く、首陽山在河東蒲阪、華山之北、河山之中と、○薇 薇に似て稍大なり、和名「センマイ」、數莖一根より叢生す、春芽を採りて食ふ、又乾しても貯ふ、芽の形錢の大きに巻き綿ありて包む、○以暴易暴分不知其非矣 武王の暴臣を以て、殷紂の暴主に易へて、その非を知らざるをいふ、○神農虞夏云々 神農虞夏、敦樸禪讓の道超然たること久しくして、終に滅没しぬ、今はこの君臣争奪の時に逢ふ、故に我何くに適き歸らんとの意、○祖兮 周語に祖に作る、死なり。

孔子畧傳

○尼山 即ち尼丘山なり、兗州に在り、○生孔子 父は叔梁紇、母は顔徵在、魯の襄公二十二年十月庚子を以て、孔子を魯の昌平郷の鄆邑に生めり、○俎豆 祭器の名、牲體を載するを俎といひ、菹醢を薦むるを豆といふ、俎は几の形、木にて造る、豆も亦木にて造る、三禮圖に出づ、參看せよ、○季氏史 史は史記に委更に造る、委積倉廩を主る、○司楫吏 楫は史記に杙に作る、蓋し犠牲を繋ぎ養ふ所、この官は、即ち孟子の所謂乘田なり、○畜 音嗅、獸産なり、○老子 楚の苦縣の人、姓は李、名は耳、字は伯陽、又曰く、一の字は聃、道德五千餘言を著す、○季孟之間 魯の二卿、季氏最も貴し、孟氏下卿たり、季氏孟氏を待つ、中間の禮を以て、孔子を遇せんとするなり、○匡 宋の邑なり、○陽虎 陽は姓、虎は名、字は貨、季氏の家臣、○止之 家語に匡人簡子以甲士圍夫子とあり、○醜靈公所爲 史記に、衛靈公與夫人南子同車、使孔子爲次乘、招搖市過之、故孔子醜之、有未見好德之語、○桓魋 宋の司馬向魋なり、桓公に出づ、故に又桓魋と稱す、○頽 頽なり、○采陶 陶音遙、舜の臣、○蠱鬻然 瘦瘠にして意を得ざる貌、○喪家之狗 主人哀荒して、飲食せられず、故に瘦削するなり、○竇鳴犢 舜華 晋の二賢大夫なり、趙簡子未だ志を得ざる時、二人の助に頼る、その已に志を得るに及び、乃ち之を殺す、○丘之不濟此命也 家語に、鳥獸之於不義、尙知避之、況於人乎の語あり、○詩曰 小雅何草不黃篇なり、○咒 音「シ」、野牛、一角青色、重さ千斤あり、○子貢 姓は端木、名は賜、○顔回 字は子淵、孔門第一の高弟なり、○書社地七百里 七百里は事實においてあるまじく思はる、姑く闕如する可なり、○令尹 楚の相を令尹といふ、子西はその字、○序書 書經を次第編輯するなり、○唐虞 唐は堯典、

虞は舜典なり、◎秦繆 繆は穆と通ず、秦誓をいふ、◎象象繫辭說卦文言 象は文王繫くる所の辭、一卦の吉凶を斷ず、乾の元亨利貞の如きは是れなり、孔子從つて之を釋す、故に通じて之を象と謂ふ、今各卦の象曰以下の辭これなり、象は、周公繫くる所の辭、卦の下象は、一卦の象を解す、之を大象と謂ふ、乾以天爲象の如きは是れなり、爻の下象は一爻の象を解す、之を小象と謂ふ、乾の潛龍勿用の如きは是れなり、孔子從つて之を釋す、故に通じて之を象といふ、今各卦の象曰以下の辭是れなり、繫辭は、天地の間與人事の始終を統言する所以なり、說卦は八卦の徳業を陳說する所以なり、文言は乾坤の妙理を釋論する所以なり、以上皆孔子の序述する所なり、◎章編三絶 古者は竹にて簡をつくり、熟皮にて之を編む、三次も斷絶するは、易を讀むに勤めたるを知るべし、◎十二公 隱、桓、莊、閔、僖、文、宣、成、襄、昭、定、哀なり、◎絶筆於獲麟 春秋の經は、西狩獲麟の一句に止る、麟は麕身牛尾馬蹄、毛蟲の長とあり、◎子夏 姓は卜、名は商、◎六藝 禮、樂、射、御、書、數をいふ、◎七十有二人 顏回、閔損、冉耕、冉雍、宰予、端木賜、冉求、仲由、言偃、卜商、顓孫師、曾參以下實は七十六人なり、家語に出づ、備考 米元章孔子贊に曰く孔子孔子、大哉孔子。孔子以前、既無孔子。孔子以後、更無孔子。孔子孔子、大哉孔子。と大聖孔子を贊する此の如くにして正に體を得ると爲す、

格言七則

◎學而不思則罔云々 論語爲政篇に出づ、孔子の語、朱子曰く不求諸心、故昏而無得、不習其

事、故危而不安と、◎學如不及云々 泰伯篇に出づ、孔子の語、朱註に曰く、言人之爲學、既如有所不及矣、而其心猶踈然惟恐其或失之、警學者當如是也と、◎吾嘗終日云々 衛靈公篇に出づ、朱註に曰く、此爲思而不學者言之、蓋勞心以必求、不如遜志而自得也、李氏曰、夫子非思而不學者、特垂語以教人爾と、◎博學而篤志云々 子張篇に出づ、原文には、この下に、仁在其中矣の一句あり、朱註に曰く、四者皆學問思辨之事耳、未及乎力行而爲仁也、然從事於此、則心不外馳、而所存自熟、故曰仁在其中矣と、蘇氏曰く、博く學べども志篤からざるときは、大にして成ることなく、泛く問ひ遠く思ふときは、勞して功なしと、◎尊徳性云々 徳性は、わが天より受くる所の正理にて、即ち仁義禮智の性をいふ、道は由なり、循ひ由るなり、問學は、格物致知誠意正心の事にて、博學審問慎思明辨篤行の功なり、◎天行健云 乾卦の象辭なり、天に運行不息の象あり、君子之に法り、人欲を以て天徳の剛を害せざれば、則ち自から盛めて息まず、

冬夜讀書

◎晉晉帥 字は禮卿、茶山と號す、備後神邊の人、那波魯堂に従ひ、程朱の學を受く、郷に還り塾を開き、生徒常に滿つ、文政十年八月歿す、年八十、著すところ黄葉夕陽村舍詩、筆のすさび等あり、

游京師郭南廢園記

○汪琬 字は茗文、鈍翁と號す、長洲の人、晩に蕘峯に居り、因て以て自から號とす、順治乙未の進士、戶部主事に官す、康熙己未鴻博に學けられ、編修を授けらる、詩は王新城と名を齊うす、時に汪王と稱す、文は經史に根底し、清朝三家の一たり、鈍翁前後類稿、蕘峯文鈔等の著あり、○京師北京城なり、直隸順天府に在り、古の燕國の地なれば、一に燕京ともいふ、周圍四十里、(支那の一里はわが六町弱)九門あり、南を正陽といひ、南の左を崇文といひ、南の右を宣武門といふ、他の門はこの文に關聯なきを以て略す、○菜市 正陽門外最も繁華熱鬧の區とす、宋の文天祥が刑せられたる菜市と混すべからず、菜市は、安定門(北京城の北門の名)内に在り、○勝國 左傳に勝國者、絶其社稷、有其土地也とあり、込國の義に用ふ、こは明朝を斥す、○箕踞 兩脚を伸し、箕形の如くに踞するなり、○相羊 逍遙に同じ、○褌花 褌は雜に同じ○孔子樂以忘憂子淵氏云々二語論語に出づ、子淵は顔回の字○至人 道の至極せる人、莊子逍遙遊に至人無己、神人無功、聖人無名とあり、

備考 この篇分つて三段とす、一段は廢園を記し、二段は遊樂を記し、三段は己が寄する所ありて樂むは、至人の真樂に及ばざるを言ふ、

獨奕先生傳

○魏禧 字は氷叔勺庭と號す、清の寧都の人、甲申の變、愍帝社稷に死す、禧慟哭日に縣庭に臨み、義兵を倡へんと欲して果さず、乃ち隱居して教授す、康熙十七年博學鴻儒に擧げらる、疾を以て辭

す、十九年卒す、年五十七、兄際瑞、弟禮と並に文章を以て名あり、人之を寧都の三魏と云ひ、宋の三蘇に比す、著すところ左傳經世鈔、及び文集等あり、○子聲 碁石の聲なり、○藝花竹 藝は藝と通ず、種なり、孟子に樹藝五穀とあり、○枰 博局なり、楊子方言に、投搏謂之枰とあり○諸葛武侯 名は亮、字は孔明、瑯琊陽都の人、劉備に仕へて丞相となる、忠武侯と諡す、詳しくは本書卷の八、隆中之對及び三國志の傳にて知るべし、○仲達 魏の將軍司馬懿の字、○抱膝時 三國志に諸葛亮長嘯抱膝とあるをいふ、

記峨眉松

周鴻單 字は雲鶴、清人、○峨眉 四川省嘉定府に在り、漢の南安の地、○生於憂患死於安樂 孟子告子篇に出づ、人の生全は、憂患に出でて、死亡は安樂に由るをいふ、○慕 慕府なり、節度使の類をいふ、○莫逆 心に逆ふこと莫きなり、莫逆交は、至つて親密の交をいふ、莊子に四人相視而笑、莫逆於心、遂相與爲友とあるに本づく、

看竹圖記

○朱彝尊 字は錫鬯、竹垞と號す、秀水の人、少くして聰慧、人に絶す、文を作るに、千言立ろに成る、又詩に工なり、崇禎の十年、浙の東西大に饑う、朱氏中人の産なし、是に至り幾んど粒を絶つ、比隣の王氏老僕あり、その日午炊烟なくして、書聲の琅々として輟まざるを訝り、餽るに豆粥

を以てす、彝尊以て諸父に奉じ、自ら饑を忍びて書を讀み、自若たり、康熙十七年博鴻に擧げられ、都に入る、時に年五十四なり、年八十一にして歿す、著す所る經義考、曝書亭集、日下舊聞等あり、
○寧都 江西省贛州府に在り、○魏叔子 名は禮傳は前の獨奕先生傳の條に出づ、○辛亥 康熙十年なり、○秀水 浙江省嘉興府に在り、○錢塘 浙江省杭州府に在り、秦に錢唐といふ、唐以後唐を改めて塘とす、○甲申 明の崇禎十七年なり、この年、李自成京師を陥れ、帝萬歲山に歿す、○大同 山西省大同府に在り、秦に雲中といひ、漢に平城といふ、○邊障 邊塞に同じ、○籜 竹皮なり、

烟雨歸耕圖自贊

○饑 音「エフ」、玉箝に餉田食とあり、爾雅の疏には、野饋曰饑とあり、○環堵 堵は當古の切、垣なり、一丈を板となし、五板を堵と爲す、禮記儒行篇の字面、また韓詩外傳にも、原憲居環堵之室、茨以蓬蒿とあり、

立言

○立言 左傳に見ゆ、本書卷の八格言一則は、即ち是れなり、○顧炎武 字は甯人、また字は亭林、江南崑山の人、年十四諸生に補す、志操絶特にして心を經書に專にす、凡そ國家の典制、郡邑、掌故、天文、河漕、兵農の屬、原委を窮究し、得失を考正せざるなし、康熙間詔して博學鴻儒の科に

擧げ、明史を修せしめんとす、大臣亦争うて之を薦むれども、皆辭して未だ赴かず、西北を周歴すること二十年、華陰に卒す、清朝に於て、學根柢ある者をあぐれば、亭林を以て最とす、吳江の潘耒、その遺書を叙して、世に行ふ、著すところ天下郡國利病書、肇域志、金石文字記、日知錄、左傳杜解補正、石經考、二十一史年表、山東考古錄、亭林詩文集等數十種あり、並に學術世道に補あるものなり、

初刻日知錄自序

○日知錄 顧炎武著す、日知錄集釋三十二卷、黃汝成箋註本を善とす、○上章 十千の庚を曰ふ、爾雅に甲を關逢、乙を旃蒙、丙を柔兆丁を疆圉、戊を著雍、己を屠維、庚を上章、辛を重光、壬を玄黓、癸を昭陽と曰ふとあり、史記にも見ゆれども、文字やや異れり、○閩茂 十二支の戌をいふ、爾雅に、寅を攝提格、卯を單闕、辰を執徐、巳を大荒落、午を敦牂、未を協洽、申を涪灘、酉を作噩、戌を闍茂、亥を大淵獻 子を困敦、丑を赤奮若と曰ふとあり、○藏之名山 司馬遷の傳に、太史公協六經異傳、齊百家雜話藏之名山、副在京師とあるに本づく、

西諺漢譯

備考 左に十三則の原文を順序によりて示さむ

1. To say little, and perform much, is noble.

2. Think to-day, and speak to-morrow.
3. The hand of the diligent maketh rich.
4. Wisdom without justice is but craftiness.
5. Want of punctuality is a species of falsehood.
6. Error is always in haste.
7. Happy he who lives in peace.
8. No pains, no gains.
9. Threatened folks live long.
10. Zeno, of all virtues, made his choice of silence.
11. Proud men have no real friends.
12. If you go to Rome, do as the Romans, do.
13. Glory follows virtue.

六卷終

明治三十四年八月廿二日 印刷
 明治三十四年八月廿六日 發行

非賣品

編輯者

東京市小石川區原町百二十番地
 國語漢文研究會

發行者

東京市神田區錦町一丁目十番地
 三樹一平

印刷者

東京市神田區美土代町三丁目一番地
 白土幸力

印刷所

東京市神田區美土代町三丁目一番地
 三光堂



發行所

東京市神田區錦町一丁目
 大阪市東區備後町四丁目

明治書院
 吉岡平助

